風流志道軒傳

四

特
へ遠 13
2.019
4

明治文庫
へ 13
2019
4

風流志道軒傳巻之四

梅ヶ枝よりも深く進ハ和泉堺まかせ船ふなよ
より南へ深たる大河の流ふかり立けるゆゑ水の形を
大なれざるゆゑ多くハ川の名ハ呼なるさ毎ふちん
大ゆゑれバ海嘯世の移ふとなるべしいざや歩行渡
してくんくふひまがら深さ深ケの大さ人丈ちぬ
玉の川なれハ人の渡りを松ヶ枝ふ稲刈無く命ふ生る
ふ大渡ヒバ川の末ふ人ヒ人歩行渡りの神なるがわ
ハ稲ふを玉ら流れ分ふ魚ふも似ず深ケ川ふで負ける
とく尝をかゞげて渡りけるふを深さよふ所ふ流る

川なれバさかなくゝと押流され流つ沉つ暫くゝ流ふ
命も危かりしゞ千鳥ハ舟へ近くゝなるまゝ安地をけゞ
ゆかせまゝなれバあハ方へ近くゝなるまゝ安地をけゞ
てくゝ向の岸へ着たりけり去ほくゝも彼流りしゝ人
いかゞなりつらんと手をなれバ此ハ出脚出て難た
日本人なれども是の出さ一丈四尺なれバ此川あふ
ハ流ざるも沉なりあまゝ彼是出ども八川中へ流く
進ゞ舟の時なるゝ彼人くゝなるゞして棄ゝと寄
寄ゝ漕ゝをなんゝけるゞ中く辛ほハ舟がゝして
ゝ漕出の出脚出ハ舟ハ出さ一丈四尺なんゝく

なるほ漕ゝなるゝれハけ者どもをかくらひくゝ舟ゝ
奉れんくゝ計らひけるゞ漕ハ進ハ岸へ着ゝ川流
の難儀ハ労れけれバ左の通れ第左ほ三度ゝ
備く屋ゝ引立ハ後も笑ゝ卧たりしゞ行のハ
ゝゝ出ハ舟ほ二ゝ貝ゝんゝて打ゝれバよるゝ引窓よ
りゝ出ゝ出ゝ丈ほなる細ゝ綱を指入くゝ舟ゝ
法かんゝ引ゝるゝハ曲者ごさんなれ舟ハ舟ゝ綱の端
赤毫ゝ中くゝ舟ハ流アの流ゞ首をゝかくゝ情
知ゝとぬゝゝゝゝ猟ゝ丁ゞ切ゝゝバ丈より四方さ
ゝがくゝ責ゝ波ゝ難波ゝ丈も岩ゝ出ゝかりなれバスハヤ

大ようと分けかさめを出さるゝ後ハ数千方の足長
どもゝ長人をやるゝ所員バ長くと長く足と長くさゝるさ
こゝ文ばかりしゝるゝもゝ十年廿年ふれゝゝく移麻
竹葉と居並ハ雲お扇の妙あるゝゝ中く面くゝゝ
とゝバ宙ゝ引抜ハ宮ゝ抓出ハ宮ゝ分の一大ゝけ時ゝんゝ
内ふ仙人ゝ忘ゝ居ゝくゝ地ゝく彼ゝ孤ゝ命ゝ
ぬゝ扇をゝく引ゝ足ゝ長ゝ足ゝ長ゝ足ゝ長ゝ
人を脊負ふゝ仙ゝ千ゝ人をゝゝ足ゝ長ゝ足ゝ長ゝ
ゝ引ふゝ足ゝ長ゝ足ゝ長ゝ足ゝ長ゝ足ゝ長ゝ
ゝんゝゝ足ゝ長ゝ足ゝ長ゝ足ゝ長ゝ足ゝ長ゝ

なる孤ゝ足ゝ長ゝ足ゝ長ゝ足ゝ長ゝ足ゝ長ゝ
足長一人を海ゝ引ゝ足ゝ長ゝ足ゝ長ゝ足ゝ長ゝ足ゝ長ゝ
ゝゝ入ゝゝ足ゝ長ゝ足ゝ長ゝ足ゝ長ゝ足ゝ長ゝ
ゝて迎ゝ足ゝ長ゝ足ゝ長ゝ足ゝ長ゝ足ゝ長ゝ
ゝゝの四人足ゝ長ゝ足ゝ長ゝ足ゝ長ゝ足ゝ長ゝ
ゝゝふ出ハ人ゝ足ゝ長ゝ足ゝ長ゝ足ゝ長ゝ足ゝ長ゝ
輪輪ゝ足ゝ長ゝ足ゝ長ゝ足ゝ長ゝ足ゝ長ゝ
足ゝ長ゝ足ゝ長ゝ足ゝ長ゝ足ゝ長ゝ足ゝ長ゝ
ゝゝあゝゝゝ足ゝ長ゝ足ゝ長ゝ足ゝ長ゝ足ゝ長ゝ
ゝゝ立ゝゝ足ゝ長ゝ足ゝ長ゝ足ゝ長ゝ足ゝ長ゝ

あゆけるがごとき大なる玉なりけるに窮胞なるこゝに男女
ともを押なべて皆狗ふ宮なりき老人他方へ行ふを作
雲家和いなくして皆狗の宮へ樹を植てかゝるあるまけ
どもいたるまで辻〳〵ふハ海者ども樹ぬたづさへて毎
を結人をゝゝれバ樹やうふくとなんいへるの日女のかど
やらふといふがごとく海へ進もかゝれこゝへとも
狗ふ宮なれバすべて皆ゆゝ敷へ行ふ法ひく
あるも多く張なれども海へ出玉ふ人ゝハ皆縛
さなれバ海へ進をゝゝとゝ男女立ども和ゝ
しゝ行ふる男の又なるべゝ皆ゆゝしもゝ

だかり日を繰ふ法ゝ玉ふけ法ハ法かゝれなれバ
けるのゝ大孔王の耳ふ入なん人をゝゝ海へ進をゝれ
けるふ郭延の鍬長皆海へ進ゝ宮見のゝなるゝ
感じけるけるふ男子なるく商年十二年の姫ゝ一
人ゝけるが海へ進ゝ皆ゝゝをゝんなひ姫ゝも大王
もけ者を婿ゝ定めけ玉ゝ讓ゝゝゝを聖長ゝ
ゝ集ゝさゝゝ法ゝゝけるが大王の新食といひ
姫文の立人なれバ皆拾るべゝと万年を唱いゝゝ
海へをもかへゝ家を改んゝ多くの女女遊
立ども一ゝなる方へ行いゝの結婚ふ合玉を

風流志道軒傳

風流志道軒傳

いく條たる天子のお衣服を着お裁ち女達うりく
ふ淵こをぐ筆をとり紙おる束を若や智をして狗
をうれば宮ちく〜こるく大ふ行を洗ぶ紙束打捨逃
入けるゞ一目の方かく〜しく雑男こゝ云ちゞら鼠宮
ふ引かへこそこのおるかゝとの狗ふ宮さんなる形
みく〜はこのもふハはさらゞ大王〜を姫ゞ方へ
もけ申奏ゞのみこべしゝ法姫やく多く笑へければ
淵こをしたゞきれ形ふ宮くはこの大臣まりく淵
こをふ向こ白淵ゞ宮稲れたれば大王逃こ子ゞん
こ宮方ゞりしらゞも呂ゞ母ゞやゆくハ狗ふ

宮ゞさかこハゞるよ〜ゞはくはこ宮ハ多ゞ行る
このハ狗の宮廣く新ゞ恵ゞ狗ハ宮ゞ〜ゞ宮宮
ゞゞ紀者ゞんゞゞ云信ふ心がゞゞ法宮ゞゞの天
子ふハゞ〜かこけれゞゞこゞの狗宋奏法ゞりふく
玉境ゞり逃掃へゞゞ大王の勅命ゞれゞはゞ何ゞ穿狗
玉ふ一百も逃奏けゞゞいゞゞゞふお立のけゞゞ下紀ハ
ゞり竹ゞゞゞれゞ初の契引かこく妹脊の縁も
淵こをふ宋狗ゞさゞりゞれゞゞゞゞゞりゞ
ゞゞゞゞゞ倒のお扇ふ打ゞく蛾夷琉球ゞふ
乃ゞ莫刮宋古堪穢門塔刺淳泥百児妖

亜莫那斯　亜毘牟亜　亜刺教亜尓瑳尼亜
天竺の薬陀を始めとして其の弟子ふかい業を
ならぬうちに金製八本用ひる鍼ふ日
和下話ぎゃうこう伝　産婦の藝おこたらぬ地名まで
迦毘羅ばるを出てしたがひ大あり出て釈
の代より譲結し赤業様　町屋敷法名を記録
とを押流され火の除ならぬ又手清水ふ
手ん流といふ所神僧御の教しへ　からぶ出
り深のでくちちみとふ細工あくたひと云魚
なれく者ふ　大酒を呑ぐこをひ歩行を業とす

又おちうしたまちうちを医ふいひ又薮
医ふとふけふの人皆行を丸めれふ無なるも
ちり学問は素かざり人の病は来るを業と
すれども年ふ下こんふちり書物とれば間の先
らを尻の下より火鍋と云ふ脳を学問するも
ちろん品毒ふ功ふ煙落を若と
て手人ふいちうの妙術をもちめ鍼ふ神より
ぜく竹惠のすぐれいたれば　幸ふ蝶
屋敷の貴賓ふ忠をちり立かけまはりて身
一の業おも張かなぐ所やけども中の業を吟味

もゝだ牛孫八牛の孫と云人是霧風ハ大海の底
をゆくといふ古人の詞ハ遠ひ意ハ知ず千方なる事ハ
で有ける又四角四面なる事ハ丸ばゞ事
ひ又ちんこぶ事も云はまの人面大ぶして事なよ
りをいひちらし他事ハ東し者ハ面白いをゝバ
能事をくんぢたちつぶかくして世界ハさう以後く
笑ハ事を知る能ハ事なる事なり又いかさま事
なんいる事ハ事ハ事れば事の人寄集ハ事ハ事て漕出し
撐蒲一海ちつふ海人連ハ目の一ちつ二ッなる種類
ハ嗜ハ事て裸ハ事て孫ハ事れバ海ちを事ハ事ハ事て迯

迯けりかく拙くの苦労組織世界中の事ハ海
陸ハ事ハ事ハ事ハ事れハ事の物なりとハいへどを云
ハも見ハ事れば事ハ事ハ事人者の事すいを
嗜ハ事ハ二月ばかりハ又見物体ハ事ハ事ハ事のを
ハ事ハ事て事ハ事ハ事ハ事ハ事ハ事ハ事ハ事ハ事ハ事ハ事ハ事ハ事
りけれバ事ハ事ハ事ハ事ハ事ハ事ハ事ハ事ハ事ハ事ハ事ハ事ハ事ハ事
郭の事乾隆帝の位の事ハ事ハ事ハ事ハ事ハ事ハ事ハ事ハ事ハ事ハ事ハ事
事ハ事ハ事ハ事ハ事ハ事ハ事ハ事ハ事ハ事ハ事ハ事ハ事ハ事ハ事ハ事
がめんて彼ハ事ハ事を脊ハ事ハ事ハ事ハ事ハ事ハ事ハ事ハ事ハ事ハ事
ハ事ハ事ハ事ハ事ハ事ハ事ハ事ハ事ハ事ハ事ハ事ハ事ハ事ハ事ハ事

り白豆ふ入ごと人参を加へたるもの豆ふ
ずかやく粉なの高麗の方なくてんぐりけるが後
高ふ豆く打なかもれハ三千人の女郎形をいろどり
ものぐんぢら霜の眉あをたら紙一貫人の粉首
久米の仙人ハあ法ふ女の赤絹湯巻のぷら法さて
脛の白くてんーふさく毋を美ひ一たなーとたり
かく粉なの貫人の中ヨ書ハ新迹も芳金の涎
をるがー達磨の貝ぞも絹糸のごくるべー絹と
進もん乳く城ふ出るるを三らで接交の陽ふか
ふく唐ものく女女の国へで毋びけるがいつとなく

主婦竹へらふばいかさま変化の不ゐるるんと掌柳
竹下打集く徳ふをあり空方八方牝をそらー寓
直の武士嚴主なれどもを行るも同ふさんだらず
紙れどもかるるするどん粉やそそりクれバ抽ハ魅魅
魍魎の云ハざりう又ハ白ふ中ふくをを姫絹ふお
さらべ赤ものぶひ狸のさんを八寓変狐が三足尾が
七つの数ならバ打とのるぶみてかなふぶー芳絹
云絹ふ金ーどて四郎なるべーなんで徳銭一決やぶる
変ふ宰相ヤされけるハ郎く魑魅鬼神の数ならバ
見紙いるをぶるるとろく人の見紙

弱れるハいぶかしく思ふてそだく張く負る山地
ひさるを不ふかうぎるぎるの入口ふ細なる物を敷
金寓直の武士怪事必把を折く歩びくるん家び
居ける淵をハかるるるふハ寓白波の意氣閑ちるうち
と称なんを法嫁ゆ紅く彼ハ敷かく分を原一るる
る丈思ふ宮ハさらふ人ぐれとも敷一金たる
砂のと見ゆの外をめどふして思ひたる寓直の武
士彼大把をるげかられバ敷んとするるもたるむぐん
や無分ふ火外く 総とれバ淵を進すぐ紅ゆるくるぎ
常ふ引ぐ紅ゆ 探ふるて敷出る間ハ敷も山地も

一時ふ三ゐく戻ぐ成たりけれバ丸探の淵を海
忽然とたるハれく始く人間ふかりるれハ寓直の武士
おり乗りるるふるふハいかめて事のおふ引出すされ
バ楽抜く必生ぎるるハかるるるるを云るべー事
おくハ紅ゆるふ繋く淵をが外のと紅ゆたる反ハ敷
をむきんのるるりるるハ淵ふ被紅ぎり又るるるら
いれるバいりるる間ふ外生るんを安るるも多かり
たり事生ハ淵をを法紅たりて彼ゲ人ゆるるるる
ふを宮皃淵ゆらぎる者の紅敷かる術をなりて敷
浸文ハ思人たりゆくるるふハを的淵を進紅を抜と

京に異江戸の者なく深井清兵衛といふ者あるが京師風俗仙人の教ふまかせ法華の人情をもらんがためなりとゆるゆるくとそんつけるふけ城中の後宮ふ思ひ入思ひすとなる女の笑ふるふくまよひて我が人を失ひ有師の仙人はとがめなく仙術成さ発られしお扇を焼れて御を失ひ今を京外を有候天かくはてくの丸探る廉のむ記外と笑れて呉玉ふ和を洗さんすを北ふ及ぬ深井あれバとくく刑ふ行ふべーと羽すでーくやとれバ手的者も邪居も無く法しにるするかとて特法玉をめぐりて居たるるあんとく

ハーくやとべたため縄をゆるーー京都をあたハ行く酒肴をとてなーて亭たこを招ーて百家百家席ふ法ら孤法の方ふ居ようとくくの女なを遠目年人の寝ふ行ふぬ張ーに行るゆんーて要笠の弓ふ紙ふんとたきみ法く動とかふのて笑居のふ清を御ん義者くまより法玉めぐりたる和法をるるす目をかさーのれバ法玉の人お与就山海の孫子まくを参お法みけれハ亭志虚威あり世界廣ーとハいーとと京廣去の丞ふ法ーける大山ハるーたを有けれバ清をけるハ行のるう法玉の山北内まくハ

まづ又無ち淵一なれどもそれ有人の目をよハ不二と
いつる名山ありそれ大さ又無ふもるうまさらり八葉の峰
そそだちて巨時ふ色の消るてもなく仙色のまより見と
ハくも白毫さかしまふ勇るとなるも仙りなかくふいふ
云の名もあかりけり不二の白雪くちんとなふと
流し風八人穴を出くこ三千世界我涼うしを八禁よ高
く白酒くあく旨がらする又無ちんどのでそれハまる後
ふふもふをありとやけれバ亭大ふ踏のひ苦目ふの画
工を舟といつる者ふ玉ふ朱彼山を画しうり角去人
も云保の不乳も浮鴻の仙系も家ハそそ云と絡ら

云ふくふ名ふ山ふハ及ふしとくふうをハ思ひしが洲が初と変
しより初くふ不二の万ふの山ふまそりたるを云れり
永ふ中百姓物をたをてバ仙ふふをもなけれとを
不二ふ山ぎかり日ふ本ふまけ多るるふ江念都八年橋なれ
ハ山とより結ふ山ハ多くの人ふを絡なく不二山我
築ふ色く浪世ふ名を踏すべ一洲ハ彼山を絡ふ云へ
ばら人なふハ神をゆるしてなる仙くなるすべ又無の内
仙ふの山ふくふ人立ふ才巷くて不日ふ不二山
を築べしとの勅令洲ふ遊ぶく私日ふ生れたれ
バ不二の形ふくすしハ云へたれとも無ふハ格やされバ

四位後をうかがうに不二山なる我ちからとも用利者ふ
又ゆられ家の不ちふ出来ありけ思ハ分ぬるんと
似せ物源の名を法ん寺代の和尊なれハ一まつ
日本へ立帰り不二山の雛形をうれ後ゆべし赤ゑを
雛形をおふ仕方しみるべけれハ唐土中の紙と紙
とをうあつめ集不二山をうりぬきぶしてけ方ふく集し
山ふすつうりと打きすれバ遠ゆ白ゆくいろもも
立ち寧相かぶりを打ふりて背参の始皇の時除
福といふ大山源り蓬莱山ふ立ふく不死の薬代求
ゑおこハふかけしためしもみ代ゆうかつふ巻の春迎ふず

をとかる大山をとりぬきふ紙代等市ゆ代からふ
ハ大ゑふなれハ出来蓬山の子規ふ仕方ハみをゆ規
と冠をかくふけ是葉あれハ海ゑ遊ゑみ出ける孔
きひのゑかゑ紙ふ家く紙人ハ皆ゑの居ゆるれハ
中く一人の和ふく迷られハちるべかゆ又不二山をうり
ぬくゆ家ふ一つの仙術ゆり紙と粘ハ代の角ゆをと
なく唐土中の孔縣へ公後をかけハ方ふ拾べ
一をゆ一をゆる時ハ家日の本孔高孔ゑを唐孔の
又雪より蓬屋仙女ゆ徳ゆる麻をとをめくをうり
ぬきふ一虚徳ふ倚へゆん本ふ日本人ゑ掛く

かを遠ひこれ隣と無重をつゝみ中をくりぬきて
めの為に大ふ感ひ入りてふ時の人の智恵なるかを
いとゞ用ゐせよとて唐土中人鶴を釣り絲を粘
集る事山のごとく太祖三年万艘を造て進ぜ
繰綿師の妻ハ江ふ丈夫素人なれども小細工のこと
若ハ百出し洛を進ぶも拙くの猶なりて不二山張
板太夫といふ者を召り同和紙を定め三年万艘
一度ふ出来ありけるハ国中ゆ一かりし次第あり

風流志道軒伝巻三終